

祝. 神経心理学 100 号

山鳥 重

日本神経心理学会第3代編集委員会委員長, 第5代理事長

先日, 森悦朗編集委員長から「神経心理学」誌の100号記念に何か書いてほしいという依頼メールを頂きました。そうか, 100号か, という深い感慨にとらわれています。この感慨には, 発刊当時の思い出や, 既にお亡くなりになってしまった学会役員のお顔や, 編集委員の先生方のことや, わたしが編集長を勤めさせていただいた何年間かのことなど, わが日本神経心理学会にまつわるいろいろな感情が混じり合っています。

振り返ってみますと, 学会前身の神経心理学懇話会が初めて開催されたのが1978年5月30日でした。故大橋博司先生(当時京大精神神経科教授), 故豊倉康夫先生(当時東大神経内科教授), 鳥居方策先生(当時金沢医科大学神経精神科教授), それに杉下守弘先生(当時東大神経内科)のご提唱で, 日本神経学会の年次学術総会の開催中に, 同じ会場の一室を借りて, 同好の士が集まり, ささやかな研究発表会が催されました。品川のホテル・パシフィック一階の「菖蒲」という部屋でした。小生もトップバッターで発表させていただいたので, よく覚えています。わずか夕方2時間ほどでしたが, 同じ学問的関心を持つものの集まりでしたから, 参加者全員和気あいあいあい, 素晴らしい会でした。

最初はもちろん機関誌などありませんでしたが, 学会で発表された研究のうち, シンポジウムに組まれたものだけは, 豊倉先生のお世話で雑誌「神経内科」や, 大橋, 鳥居先生のお世話で雑誌「精神医学」に掲載されました。

われわれ学会員の欲しかった自前の機関紙第1号が発刊されたのは, 1985年です。懇話会発足から7年が経過していました。雑誌の名前はズバリ, 「神経心理学」, その英語名は「Japanese Journal of Neuropsychology」になりました。現在に引き継がれている名前です。わたしが理事長の時に, 学会員から公募で選んだ, 脳のシンボルマークが付け加わっていますが, それ以外は, しゃれた青色のレイアウトも昔のままです。編集委員長は大橋博司理事長が兼務されました。わたしも編集委員に選んでいただきました。第1号から本誌に関わらせていただいたわけで, 本当に名誉なことだと思っております。

最初は年2回発刊でした。そのうち年3回になり, 今の季刊に落ちついたのは確か1990年でした。その後, 現在まで, 一度も欠号を出すことなく, 大幅な発刊遅れも起こさずに, 100号を迎えることが出来たのですから, 本当におめでたいことです。「神経心理学」創刊以来の学会役員の方々, とりわけ代々事務局を担当していただいた理事の先生, および代々の編集委員の先生方のご努力に心からの感謝の意を表します。

1985年の「神経心理学」創刊号から本年の100号記念誌まで, 26年が経ちました。短いようで, 長い年月です。この間, 神経心理学に対する医学界, 医療界, さらに一般社会の見方はおおきく様変わりしたように思われます。最初はまさに同好の士の集まりであり, 医学の片隅の領域でしたが, 最近は高次脳神経障害学という新しい呼び方が登場したことに象徴されるように, 神経心理学的症状を持つ人たちの日常生活全般に関わる大切な医療分野として, 医学プロパーの領域を超え, パラメディカル領域から心理学領域にまで, その重要性が認識されるようになってきました。この

大きな流れを作る上で、本誌が果たしてきた役割は決して小さくない、と思います。

このように存在感を増している領域ではありますが、難しい問題を抱えていることも事実です。それは、神経心理学という研究領域が内包する本来的な方法論的困難です。脳機能についての計測技術や、心理的テストのデータ処理方法は時代とともに目覚ましい進歩を見せていますが、残念ながら、神経心理学の研究方法論にブレークスルーは起っていません。

神経心理学者の関心は、脳卒中や脳外傷による失語・失認・失行などの古典的巣症状論から、統合失調症から、認知症、さらには、発達障害など、発症機序も病巣分布も経過も症状も、すべて古典的枠組みには収まらない、複雑なシステム症状論へと大きな展開をみせています。これらの問題は、まぎれもなく神経心理学的問題であり、神経心理学者が挑戦すべき問題であることは論を待ちません。その意味では、この関心の広がりにはむしろ遅すぎるくらいかもしれません。

にもかかわらず、古典時代の神経心理学が抱えていた、神経心理学的問題の根本的な困難性は、今もそのまま残されています。すなわち、神経活動と心理現象の関係というものはいったいどういうものなのかという、神経心理学のパイオニアである、ポール・ブローカやヒューリングズ・ジャクソンが悩み続けた問題は決して解決されてはいないのです。

この厳しい現実には、今年、本学会理事長の河村満先生が訳出・出版された「Bennett MR, Hacker PMS 著：脳を繚く（医学書院）」でも、鋭く指摘されています。神経心理学は決してピュアーな神経科学ではありえませんが、ピュアーな認知心理学でもありえません。といって、ピュアーな治療医学にもなり得ません。われわれは、わけがわからない部分を抱えながらの「神経心理学」をやっている、それも患者という人間の障害にかかわる「臨床神経心理学」をやっている、という現実を忘れないでおく必要があると思います。臨床神経心理学を高次脳機能障害学と読み替えてみても、このわけのわからない部分が消えてくれるわけではありません。

日本神経心理学会がこの中心的な難題から決して顔をそむけずに、むしろ、その難しさを導きの灯として、今後も地道な研究活動を続けていかれることを切に期待しています。そして、機関誌「神経心理学」が、今後も「神経心理学」を追及する人たちのための中核雑誌であり続けることができますよう、心から願っています。